

「長良川の自然の恵みと、そこに暮らす人々の営みが鵜飼を支えました」

鵜飼は、長い伝統を有し、業務担当者の知識に依存する職業である。鵜飼を維持するには、漁師だけでなく、多様性に富む大規模な職人のコミュニティにおける、技量と努力が必要となる。造船工、大工、船員、籠の編み手、そしてツアーガイドや接待担当者は、長良川の鵜飼を下支えすると同時にこれに支えられる、複雑な仕組みの一部となっている。

観覧船の業者

観覧船は毎晩、鵜舟に伴走して長良川を定期運航している。他の観覧船や漁舟を邪魔しないように配慮しながら、乗客に鵜飼の最高の眺めを提供する。伝統的な木製の舟が長良川沿いを進んで行く。船首と船尾に乗る船員が長い棒（竿）を使い、舟を操っている。船員は、風、川の流れ、水深の変化に対処するため、竿と長いオール（櫂）のみを使っていつでも瞬時に航路を変えられなければならない。この技能の習得には、川での長年の経験を必要とする。現在、岐阜の観覧船の船頭としておよそ130人が登録されている。

舟の建造

鵜舟と木製の観覧船は、伝統的な方法で建造される。どちらの舟も、高野槇を材料として、舟釘と呼ばれる特注の鉄の大釘で組み立てる。具体的な設計案や設計図は用いず、職人は、技能、経験と、注文主からの具体的な要求のみを基に仕事をする。匠の技は、人から人へ直接口授されることでのみ維持される。経験豊かな造船工が、彼らの後継者に技能を教えながら、一緒に働く。後継者は、未来に匠の技を残していかなければならない。舟造りの伝統は、何百年もの間、親方から弟子に、この方法で伝えられている。

竹籠細工

現代では、伝統的な手作りの道具のいくつかは、鵜匠自ら製作を手掛けている（過去にはこれらの道具は地域社会が供給してきた）。鵜匠が作るのは、例えば、藁の草履（足半）や撥水性の藁のスカート（腰蓑）である。しかし、竹籠などのより複雑な製品は、今もなお、専門の職人の手によってのみ作られる。鵜の睡眠用の籠（鳥屋籠）、鵜を川に運ぶときに使う2羽あるいは4羽が入る籠（鵜籠）、鳥が捕った鮎を吐く籠（吐け籠）はすべて、地域の職人が、地元の竹で編んでいる。吐け籠は、川での使用を意図して特別に作られている。底は平らで正方形になっており、揺れる舟の中でもひっくり返る可能性が低い。この籠の先が細くなるように編まれるのは、籠の底にある魚が押しつぶされるのを防ぐためである。

松材の採取

鵜舟の船首で輝く炎は、鵜飼という職業を表す最も代表的な視覚イメージの1つである。火が明るく燃え続けるように、鵜匠は絶えず、松の丸太を割った燃料を籠に加えなければならない。通常、腕

に二抱えか三抱え分が一晩で消費される。過去には、松は金華山で採取され、根から節だらけの木材まで、あらゆるものが用いられていた。今日では、鵜飼漁師は均一な長さの松を調達、備蓄し、冬の間乾燥させておく。